

『水河鼠の毛皮』

宮沢賢治

ぜんたい十二月の二十六日はイーハトヴ  
はひどい吹雪でした。町の空や通りはまる  
つきり白だか水色だか変にはさくくした雪  
の粉でいつばい、風はひつきりなしに電線  
や枯れたポプラを鳴らし、鴉なども半分凍  
つたやうになつてふらくくと空を流されて  
行きました。たゞ、まあ、その中から馬そ  
りの鈴のチリンチリン鳴る音が、やつと聞  
えるのでやつぱり誰か通つてゐるなといふ  
ことがわかるのでした。

ところがそんなひどい吹雪でも夜の八時

になつて停車場に行つて見ますと暖炉の火  
は愉快に赤く燃えあがり、ベーリング行の  
最大急行に乗る人たちはもうその前にまつ  
黒に立つてゐました。

何せ北極のぢき近くまで行くのですから  
みんなはすつかり用意してゐました。着物  
はまるで厚い壁のくらゐ着込み、馬油を塗  
つた長靴をはきトランクにまで寒さでひび  
が入らないやうに馬油を塗つてみんなほう  
くしてゐました。

汽缶車はもうすつかり支度ができて暖さ  
うな湯気を吐き、客車にはみな明るく電燈  
がともり、赤いカーテンもおろされて、プ  
ラットホームにまつすぐにならびました。

(抜粋)